

長野遺跡群

もと よし ちょう
元 善 町 遺 跡 (2)

——善光寺仲見世通りガス管布設工事地点——

2009年3月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、古くから人々の足跡が刻まれています。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできない貴重な財産です。中でも土地に埋蔵されている遺跡や遺物は、当時の人々の暮らしぶりを生々しく現在の私達に伝えてくれます。

本書で報告する元善町遺跡は、日本を代表する寺院である善光寺の境内域に位置する遺跡であり、これまでの調査において多量の古代瓦や中世の盛土造成・石積・礎石状遺構などが確認されています。古代・中世の善光寺について記された当時の史料は少なく、往時を知るための貴重な遺跡として注目を集めています。今回の調査は、善光寺仲見世通りのガス管布設工事に伴う立会調査であり、善光寺表参道の仲見世と石畳との間の狭い範囲において、南北100m以上に渡る掘削および土層確認を行いました。調査地からは古代瓦や土器、須恵器などの出土と共に、礎石状遺構や人為的盛土などが確認され、古代から現代に至るまでの土地利用状況が伺えました。特に仁王門北西地点では、多量の古代瓦が出土しており、現在の道路下においても良好に遺跡が残っていることが判明しました。

ここに長野市の埋蔵文化財第123集として刊行いたします本書には、このたびの発掘調査によって得られた成果を詳しく掲載しております。その成果は連続と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました長野都市ガス株式会社をはじめ、関係各位の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

長野市教育委員会
教育長 立岩 睦 秀

例 言

- 1 本書は、平成19・20年度に長野市大字長野字元善町において実施された善光寺仲見世通りガス管布設工事に伴う調査報告書である。
- 2 調査は、長野都市ガス株式会社の依頼により長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査地は、長野市大字長野字元善町482,484～486番地先に所在する。
- 4 現地測量は、株式会社写真測図研究所に委託した。図中の座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値（日本測地系2000）と、日本水準原点の標高に基づく。
- 5 遺物図・拓本は、瓦・土器を1：4、石製品を1：6の縮尺で掲載した。
- 6 遺跡から出土した遺物は、遺跡の略記号「NGMG」を用いて注記を行い、遺構図版類と共に長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

序・例言・目次

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌（抄）	2
第Ⅱ章 調査地周辺の環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 考古学的環境	4
第3節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査の成果	6
第1節 調査の概要	6
第2節 出土遺物の概要	10
第Ⅳ章 結 語	21
第1節 凸版書文録復弁八弁蓮華文軒丸瓦の范傷進行と製作技法	21
第2節 鼠尾の出土	22

挿 図 目 次

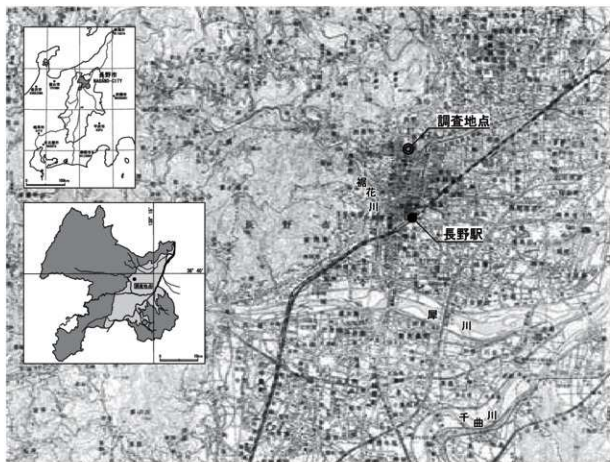
第 1 図	調査地位置図	1
第 2 図	調査地周辺の地形と遺跡	3
第 3 図	調査地位置図	4
第 4 図	調査地点詳細図	7
第 5 図	トレンチ土層断面模式図	8
第 6 図	出土遺物 軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦	12
第 7 図	出土遺物 丸瓦・平瓦	13
第 8 図	出土遺物 平瓦	14
第 9 図	出土遺物 平瓦・陶磁器・土師器・須恵器・石製品	15
第 1 0 図	凸鋸齒文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦	23
第 1 1 図	凸鋸齒文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦・不明土製品・碓尾	24

第I章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

調査地は善光寺境内域の長野市大字長野字元善町にあたる。元善町は、宝永4年（1707）に現在の位置に善光寺本堂が再建される以前に、本堂（如来堂）が存在した場所といわれており、現在町内には仲見世や宿坊といった歴史的街並みが広がっている。本調査の起因となった開発行為は、善光寺本堂から南に延びる石畳の表参道沿いに埋設されているガス管の老朽化に伴う布設替え工事であり、地中に埋蔵する文化財の保護についても協議が進められた。

平成20年の2月下旬に、善光寺事務局より善光寺仲見世通りのガス管布設工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の照会がなされ、開発行為区域が「長野遺跡群元善町遺跡」の範囲内であり、埋蔵文化財包蔵の可能性が高い旨を回答する。その後、事業主体である長野都市ガス株式会社と長野市埋蔵文化財センターとの間で埋蔵文化財保護のための協議を重ねるが、開発行為における掘削範囲が幅50cmと狭小であり、通常の発掘調査が困難であることから、工事立会が妥当と判断された。平成20年3月5日に長野都市ガス株式会社より文化財保護法第93条に基づく届出、工事立会調査の依頼書、土地所有者の同意書が提出され、立会調査の実施に至った。調査は平成20年3月17日から4月3日までの18日間、約90mに渡って実施された。



第1図 調査地位置図 (S=1:100,000)

第2節 調査体制

調査主体者	長野市教育委員会教育長 立岩 睦秀
総括管理者	文化財課長 雨宮 一雄
総括責任者	埋蔵文化財センター所長 青木 和明
	(庶務担当) 係長 宮沢 和雄
	職員 吉村 久江
	(調査担当) 主査 風間 栄一 (～H19)・小林 和子
	主事 宿野 隆史 (調査員)・塚原 秀之 (H20～)
	専門員 遠藤 恵実子・長瀬 出 (～H19)・山野井 智子
	山岸 千晃 (～H19) 小池 勝典 (調査員) (～H19)
	柴田 洋孝 (調査員・編集)・向山 純子・佐々木 麻由子 (～H19)
	小林 由実 (H20～)・小山 夏奈 (H20～)・西澤 尚紘 (H20～)
整理調査員	青木善子・池田寛子・多羅沢美恵子・鳥羽徳子・中殿章子・武藤信子・矢口栄子
整理作業員	倉島敬子・小泉ひろ美・清水さゆり・関崎文子・富田景子・西尾千枝・三好明子・村松正子
遺構測量	株式会社写真測図研究所

発掘調査を通じて長野都市ガス株式会社、善光寺事務局より多大なる御協力を賜った。また出土遺物については、近畿大学教授 大脇潔氏、京都大学大学院教授 上原真人氏、同志社大学准教授 勸柄俊夫氏、飯綱町立いづな歴史ふれあい館学芸員 小山丈夫氏より貴重な御助言を賜った。記して感謝を申し上げたい。

第3節 調査日誌 (抄)

平成19年度

- 3月17日(月) 立会開始。
第2トレンチ (SP27～30) 掘削。
- 3月18日(火) 第2トレンチ (SP31・32)
第3トレンチ (SP33・34) 掘削。
- 3月19日(水) 第1トレンチ (SP1～7) 掘削。
- 3月20日(木) 第3トレンチ (SP35～40) 掘削。
- 3月21日(金) 第3トレンチ (SP41～45) 掘削。
- 3月24日(月) 第4トレンチ (SP46～49) 掘削。
複弁八弁蓮華文軒丸瓦出土。
- 3月25日(火) 第1トレンチ (SP8～14) 掘削。
- 3月26日(水) 第2トレンチ (SP15～17) 掘削。
- 3月27日(木) 第2トレンチ (SP18～23) 掘削。
- 3月28日(金) 第2トレンチ (SP24～26) 掘削。

平成20年度

- 4月3日(木) 第4トレンチ再掘削立会。
当日をもって立会調査終了。



調査風景

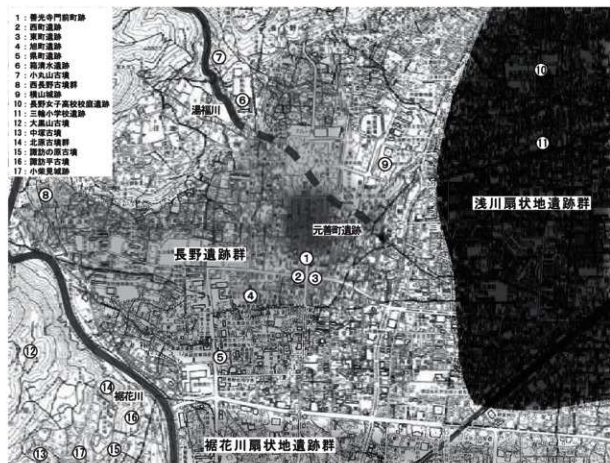
第Ⅱ章 調査地周辺の環境

第1節 地理的環境

調査地は裾花川段丘と湯福川扇状地による複合地形の上に立地する。現在の裾花川は、近世の瀬直しにより南に流れて厚川に合流するが、以前の流路は旭山北麓の里島付近を扇頂に南東方向に広がって流れていたものと想定される。また、湯福川も現在は善光寺本堂を迂回する流路を取るが、本堂が現在の位置に移転された宝永4年(1707)までは克庵寺と大動進の間を流れていたことが絵図などに記されている。

元善町遺跡を含む長野遺跡群は、この裾花川の扇状地を眼下に望む河岸段丘上に位置し、かつ箱清水北西から流れ出る湯福川の急傾斜扇状地として押し出された台地・丘陵地にあたる。砂・礫の堆積物を地盤とする水はけの良い土壌と、日当たり良好な南向きの傾斜面ということ考えると、居住に適した土地であったことが推察される。実際、長野遺跡群内では、縄文時代から古墳時代の遺構も多数確認されており、善光寺が造営される以前から連続と人々が生活していた状況が伺える。

善光寺造営後の空間利用については、いまだ不明点が多いが、善光寺門前町跡では、東西に延びる中世の溝跡が複数検出されており、中世初期段階に広範囲に渡る大規模な区画造成が行われた可能性が高い。また、人為的な土地の造成は近世・近代においても行われており、善光寺の発展とともに善光寺境内および門前町の地形の改変が進んだものとみられる。



第2図 調査地周辺の地形と遺跡 (S=1:20,000)

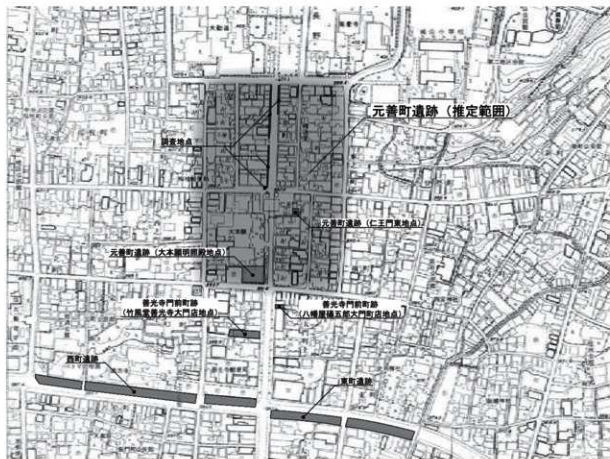
第2節 考古学的環境

調査地周辺では、現在までに6箇所で開催調査が行われている。以下、調査の概要を述べていく。

西町遺跡 縄文時代中期から近世にかけて幅広い時代の遺構を確認したが、縄文・弥生時代の遺構は少なく、各時期内においても空白期がみられることから、人々の居住が断続的であったことを示している。また、古代善光寺に関連してくる奈良・平安時代の遺構も少ないが、出土した古代瓦の中に「重弧文軒平瓦」が確認されている。中世の遺構は善光寺参道に面する大門町に集中し、13～15世紀後半を中心とする遺物が出土した。遺構は、地割を目的としていたと思われる溝跡のほか、柱穴とみられる土坑、地下室とみられる竪穴状遺構が検出されたが、町屋としての遺構配置などを見出すことはできなかった。

東町遺跡 弥生時代・古墳時代・中世・近世の遺構を確認した。扇状地の端部傾斜地に位置しているため、弥生・古墳時代の遺構は、湯福川の氾濫堆積によって地表下2m以上も埋没していたが、古墳時代を中心に36軒の竪穴住居が確認された。中世・近世の遺構は、氾濫堆積土上層にて検出された僅かな土坑や小穴のみであった。

善光寺門前町跡（竹風堂善光寺大門口地点） 古墳時代・中世・近世の遺構を確認した。中でも、13世紀後半～14世紀にかけての遺物が多量に出土した幅2.5mの溝は、調査区外まで伸びており、西町遺跡で確認された溝跡とあわせて考えると、門前町において広範囲にわたる区画造成が行われていたことが想定される。後述するが、出土した古代瓦の中に「鸕尾」の可能性が高い破片が確認されている。



第3図 調査地位図 (S=1:5,000)

善光寺門前町跡（八幡屋磯五郎大門町店地点） 調査面積が狭く、確認できた遺構は、石積みによって築かれた中世の溝跡と小穴のみであった。溝跡からの出土遺物は、かわらけを中心に14世紀～16世紀の陶磁器が出土しており、溝跡は中世末に埋没し、近世以降改変がなされなかった場所と想定される。確認された溝跡が、土地区画によるものかは不明である。

元善町遺跡（善光寺大本願明照殿地点） 古墳時代・中世・近世・近代の遺構を確認した。遺構の主体は江戸時代の土坑で、古墳時代・中世の遺構はわずかであったが、第4次遺構検出面において確認された大量の古代瓦片を含む包含層は貴重な発見であった。また、明確な建物遺構は確認できなかったが、1700点以上の古代瓦片が出土したことによって、調査地周辺に瓦葺き建物が存在していた可能性が高まった。本地点からは、県内初となる「湖東式軒丸瓦」の出土や、文字瓦の出土など新たな資料も多数確認された。

元善町遺跡（善光寺仁王門東地点） 古代～近世の遺構を確認した。第2次遺構検出面では、人為的に造成された盛土と礎石状遺構や、盛土の南面に土留めの役割として築かれた石積みが発出された。盛土内に包含される陶磁器、瓦、炭化物などは11～13世紀の様相を示しており、中世善光寺に関連する遺構と判断される。盛土内からは、多量の炭化物や比熱した瓦、漆喰壁片、塑像とみられる土製品の破片などが出土することから、古代末から中世初期の火災後の造成跡と考えられる。

第3節 歴史的環境

信濃善光寺の創建について記された当時の確実な史料は、現在のところ確認されていない。そのため、寺の創建時期は境内から出土する古代瓦や本尊を模したとされる阿弥陀如来像の様式などから推測されている。善光寺境内から出土した古代瓦は、その瓦当文様構成から生産時期が想定されていたが、長野市若槻の浅川扇状地遺跡群（牟礼バイパス地点）の発掘調査において、善光寺境内出土の軒丸瓦と同文様の瓦が9世紀後半の住居から出土し、少なくともこの時期までには瓦が生産され、瓦葺き建物が存在していた可能性が高まった。また、平成18・19年度の元善町遺跡善光寺大本願明照殿地点の発掘調査では、大量の古代瓦と共に湖東式軒丸瓦が出土したことによって、古代信濃と近江との関連を考慮する必要が生じている。

善光寺の名前が文献上に現れる最初の例は、10世紀頃に成立した『僧妙達蘇生注記』の中に記される「水内郡善光寺」であり、この頃はまだ地方の一寺院として認識されていたようである。善光寺縁起は、平安時代末期には『扶桑略記』や『伊呂波字類抄』など複数の私撰史書に引用されており、その名前が貴族社会や仏教界で知られるようになったと考えられる。善光寺は治承3年（1179）に火災によって焼失し、文治3年（1187）には源頼朝が国内の御家人に再建を命じており、建久2年（1191）には主要伽藍が落成していることが『吾妻鏡』に記されている。その後、幕府の実権が執権北条氏に移ってからも善光寺に対する崇敬・保護政策は進められており、全国の武士層に善光寺信仰を普及させることとなった。

戦国期には、甲斐の武田氏によって本尊やその他の寺宝が甲府に移されており、その後の戦乱と共に善光寺本尊も流転する。信濃に本尊が戻されるのは、40年後の慶長3年（1598）のこととなる。江戸時代になると、徳川家康が善光寺に千石の寺領を与え、再興が進められた。中世以降、善光寺は火災によって幾度も焼失しており、宝永4年（1707）に境内地北側の現在地に本堂を移すこととなる。旧本堂の敷地は、堂庭と呼ばれ江戸期には仮設店舗でにぎわう仲見世となる。仲見世に現在のような建物が建設されるのは、明治時代以降のことであり、明治24年（1891）の火災によって大部分の店舗が焼失・再建されている。

第三章 調査の成果

第1節 調査の概要

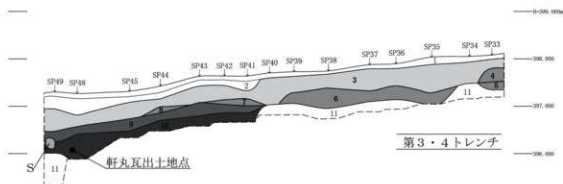
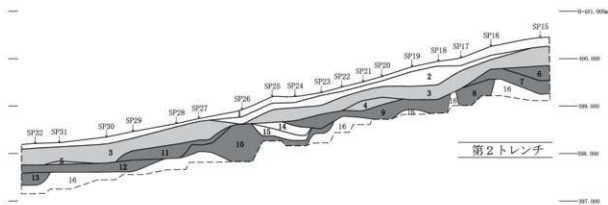
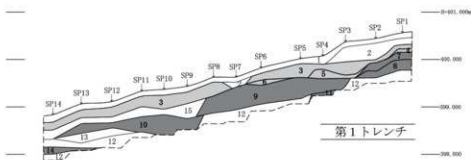
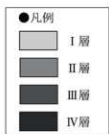
(1) 調査の方法と層序

開発事業予定地は、善光寺仁王門北から本堂手前が存在する仲見世の範囲内にあたり、既存ガス管の老朽化に伴う布設替えを主目的とする工事であった。施工による掘削は、善光寺参道石畳と既存建物（仲見世店舗）との間の幅50cmという狭小範囲であるため、通常の発掘調査が困難であると判断し、掘削時に常に埋蔵文化財の包蔵状況を確認する立会調査を実施することとなった。また、施工は夜間工事であり、1日の作業において掘削・土層断面確認・ガス管布設・埋め戻しを完了する必要があるため、1日あたりの掘削範囲は8m程度であった。調査では、3～5mごとの計49箇所にセクション地点（SP）を設定しており、各地点において堆積土層の確認・写真撮影を行った。調査箇所は掘削位置により4区分し、参道東側を第1トレンチ、西側の北を第2トレンチ、南を第3トレンチ、仁王門北西に位置する県道長野豊野線部分を第4トレンチと呼称する。

調査地は南東へ下る緩斜面に位置する。各セクション共に、10～30cmの現代舗装・砕石を除去すると、橙色、ロックの混じる茶褐色砂礫～弱粘性土の土層（Ⅰ層）、その下層には灰色～黒褐色弱粘性土の土層（Ⅱ層）が確認できる。第1・2トレンチおよび第3トレンチ北側では、Ⅰ・Ⅱ層より下は緑色～黄褐色の均質な砂あるいはシルト層となり、自然堆積層と判断される。第3トレンチのSP41地点より南側では、Ⅱ層の下に厚さ20cm程度の灰色弱粘～シルト層（Ⅲ層）が堆積しており、その下層には固く締まった暗褐色弱粘性土（Ⅳ層）が確認されている。第4トレンチのSP49地点では現地表下約1.2mにおいて、自然堆積と想定される緑色シルト層が堆積する。

(2) 堆積土層の概要

本調査は、幅50cmの掘削ではあるが、南北延長約130mに及ぶ調査区であるため、仲見世地区を縦断する堆積土層の確認を主目的とした。堆積土層は、堆積状況および小破片を含めた出土遺物から、盛土（流土を含む）と推察される土層を大きく4区分して概要を記す。Ⅰ層には、江戸末期から明治初頭所産の陶磁器が包含されており、また部分的に炭化物・焼土が多量に含まれていることから、明治24年の火災後の造成盛土層と考えられる。Ⅱ層は一概に同時期の堆積とは言い切れないが、明治期以降の製品が含まれず、小破片ではあるが土器・肥前系染付など江戸期の遺物が散見されることから、江戸期の造成と想定される。また、第2トレンチのSP16～26地点間のⅡ層からは、大量の石造物（五輪塔・宝篋印塔）が出土している。第3トレンチのSP41地点より南側で確認されるⅢ・Ⅳ層からは古代から中世の土器・須恵器片とともに多量の古代瓦が出土しており、複弁八弁蓮華文軒丸瓦や偏向唐草文軒平瓦も確認されている。第4トレンチSP49地点では、帯め固められたⅣ層に平坦面を有する礎石状の石材が掘えられており、この石材上面には瓦片が集積している状況が認められた。Ⅲ層は均質な弱粘～シルト層であり、自然堆積の可能性もあるが、Ⅳ層は古代から中世の人為的盛土層と考えられる。元善可遺跡では、平成19年9月に実施した仁王門東地点の調査において中世初期の盛土造成と礎石状遺構を確認している。本調査地点で検出された礎石状遺構の造成時期は定かではないが、Ⅳ層より明確な中世遺物は出土していないことから、仁王門東地点の礎石状遺構と同時期、あるいはより古い建物遺構である可能性も考えられる。調査区の現地形はSP30地点付近を境に傾斜角度が異なり、南側はより平坦な地形となる。調査区南端のSP49地点では現地表下約115cmにて自然堆積土を検出しており、Ⅳ層盛土時に平坦な地形を造成した可能性が考えられる。なお、土層の堆積時期は、現時点での推定であり、今後調査資料の増加に伴い、随時再検討することが必要である。



S=1:500(横), 1:80(縦)

第1トレンチ		第2トレンチ		第3・4トレンチ	
1 現代舗装	現代	1 現代舗装	現代	1 現代舗装	現代
2 砕石		2 砕石		2 砕石	
3 茶褐色砂礫	I層	3 茶褐色弱粘性土	I層	3 茶褐色弱粘性土	I層
4 灰褐色シルト		4 橙色粘土		4 黒褐色粘土	
5 暗褐色弱粘性土		5 茶褐色砂		5 明褐色弱粘性土	
6 黒褐色弱粘性土		6 暗褐色砂礫		6 暗褐色弱粘性土～シルト	
7 暗褐色弱粘性土	II層	7 暗褐色粘土	II層	7 黒色粘土	II層
8 茶褐色弱粘性土		8 黒褐色粘土		8 茶褐色砂礫	
9 黒～暗褐色弱粘性土		9 暗灰色弱粘性土		9 灰色シルト	
10 黒褐色砂		10 黒～茶褐色粘土		10 黒褐色～暗褐色粘土	
11 黒褐色弱粘性土	自然堆積土	11 黒色粘土	自然堆積土	11 緑シルト～緑褐色砂礫	自然堆積土
12 黄褐色シルト		12 暗褐色弱粘性土			
13 黄褐色砂礫		13 暗褐色シルト			
14 黒褐色～弱粘性土		14 灰色砂礫			
15 灰褐色砂礫		15 緑～灰色細砂			
		16 緑～灰色シルト			

第5図 トレンチ土層断面模式図



第1トレンチ・SP3



第1トレンチ・SP11



第2トレンチ・SP15



第2トレンチ・SP17



第3トレンチ・SP45



第4トレンチ・SP48



第4トレンチ・SP49



第4トレンチ・SP48(軒丸瓦出土状態)

第2節 出土遺物の概要

(1) 古代瓦

軒丸瓦 (第6図1・2)

出土した軒丸瓦は2点で、共に凸鋸歯文縁複弁八弁蓮華文である。1は、外区の凸鋸歯文縁がわずかに欠損しているのみで、文様面は完形に近く、全体的にシャープである。現在までに確認されている善光寺境内出土とされる軒丸瓦や、浅川扇状地遺跡群牟礼バイパス地点（以下、牟礼バイパス地点）出土の軒丸瓦と同范文様のものであるが、范傷がほとんど見られないことから比較的初期段階に製作されたものと思われる。文様については「複弁八弁」と呼称はしているが、厳密に言えば二箇所に単弁が用いられており、複弁の花弁7対と単弁の花弁2対の文様構成である。また、中房の蓮子に関してだが、牟礼バイパス地点の報告書における軒丸瓦の記述では「中央に周環をめぐらした蓮子を置き、その外側には周環もなく、他の蓮子より小さい形の4つの蓮子」となっている。しかし、出土した1を見ると中央蓮子の外側にある4つの小さな蓮子にも周環が確認できることから、中房の蓮子には全て周環があったことが判明した。

瓦当の製作技法であるが、丸瓦の剥離痕からすると、最初に范に厚さ1cmほどの粘土を詰め、丸瓦を取り付ける。丸瓦接合後、さらに厚さ1cmほどの粘土を盛るのと同時に丸瓦との接合箇所の補強も行っている。また、丸瓦の剥離面に凹凸が見られることから、丸瓦の端部に刻みを施していたものと思われる。丸瓦の端部に刻みを入れる技法は牟礼バイパス地点出土の軒丸瓦にも共通している。

2は、文様の3/4が欠損し瓦当の下半が残存している。2も、これまで確認されている軒丸瓦と同范文様で、複弁と間弁の間に見られる方形の范傷が特徴的である。牟礼バイパス地点でもこのタイプの范傷を持つ軒丸瓦が確認されている。焼成はあまく、締まっていないため、1に比べると径が大きい。瓦当裏面は、タテやヨコ方向に雑なナデ調整が施されている。

軒平瓦 (第6図3・4)

出土した軒平瓦は2点であったが、焼成具合や、出土トレンチが同じであることから、同一個体であると思われる。文様構成は、軒丸瓦と同様に善光寺境内出土とされる軒平瓦や、牟礼バイパス地点出土の軒平瓦と同文様で、偏向（葡萄・忍冬？）唐草文である。3は、瓦当の正面右側部が残存し、右上角から派生した唐草は左下に向かって伸び、三つに分岐し展開していく。下方に伸びた唐草はさらに分岐し、蕾（葡萄？）状の文様と、上方に巻き込む葉を表現している。

顎の形態は不明であるが、これまでの出土品は段顎と直線顎の形態を採っているため、どちらかの顎形態であると思われる。ただし、調整の点からすると、牟礼バイパス地点で確認されている段顎の軒平瓦はヨコ方向のきれいな調整で、直線顎のものはやや雑であることがみてとれる。この点を比較すると、3は顎部分の調整がヨコ方向のケズリ調整を受けていることから、段顎である可能性が高いと思われる。

4は、文様の正面左側下部の唐草部分であると思われる。破損面には平瓦の剥離痕がみられ、顎部分はヨコとタテ方向のケズリ調整を受けている。

丸瓦 (第6図5～第7図11)

出土した丸瓦は45点・10.79kgであった。出土した丸瓦の中で、凸面の整形を行った叩き具の痕跡は、全てナデによる調整で消されている。6・7・10・11は凹面に布の縦じ目が確認できる。

平瓦（第7図12～第9図25）

出土した平瓦は42点・11.03kgで、凸面の整形が縄叩き具によるものは25点、格子目叩き具によるものは12点、ナデによるものは5点であった。

12～18は縄叩き具によって凸面整形が行われている。12は、凹面に縦方向の筋が何本も走っているが、これはハケ状の工具によって意図的に加えられたものと思われ、このような凹面を持つ平瓦は近接する元善町遺跡仁王門東地点でも確認されている。13は、縄叩き具によって整形された平瓦の中で一番残存率が高い。凹面には、模骨痕や糸切り痕が確認できる。

19～23は格子目叩き具によって凸面整形が行われている。20は、これまでの牟礼バイパス地点や善光寺大本願明照殿地点、仁王門東地点で出土した格子目叩き具による平瓦を合わせても、最も残存率が高い格子目叩き具の平瓦である。凹面には模骨痕が確認できる。従来のように、凸面の整形は叩き具を重複して叩いているが、一部において横方向に走るラインが確認できた。このラインは叩き板の幅を示すものと思われ、これによって、格子目の叩き具は、板の縦軸に対して正格子ではなく斜格子状に刻みを施した叩き板であると考えられる。21は、凹面の布目痕に対して端部が斜めに切られている。これは意図的に端部を斜めに切りとばしたもので、「隅切瓦」と呼ばれるものである。隅切瓦は、大本願明照殿地点から縄叩き具によるものが1点確認されており、21はそれに続く2例目の確認である。

24・25はナデによって凸面の整形痕が消されてしまっている。24は、一部において平行叩き具の痕がみえてくれるが、全面的にヨコナデが施されている。25の凸面には指紋が多く残されている。平瓦の凸面の整形痕をナデ消す技法の個体は、大本願明照殿地点・仁王門東地点の両地点でも、わずかではあるが確認されている。

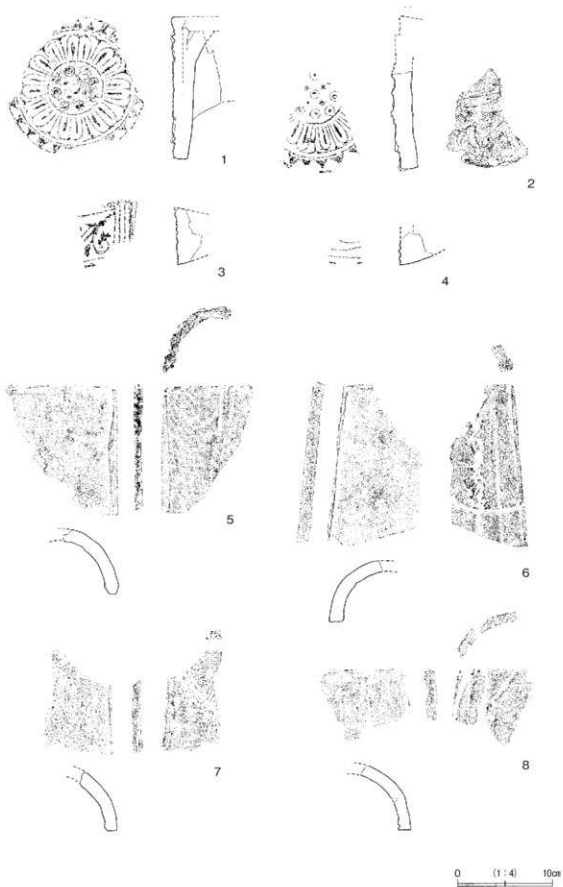
(2) 土器片類（第9図26～33）

本調査区では古代瓦以外の遺物の出土は少なく、かつ出土した遺物は小破片ばかりで、中世以前の遺物については明確な時期を特定することはできない。そのうち図化し得たのもわずかに8点のみであった。26はI層より出土した明治期の磁器であり、内外面にコバルトの摺絵印判が施されている。27はII層出土の碗で、肥前系京焼風陶器と想定される。28は近世の軒平瓦で、渦を巻くような文様が確認できる。30は外面を叩き調整された珠洲系の陶器甕である。他にも図化し得なかったが、灰輪陶器の小破片が出土している。32は須恵器杯の底部片で、ヘラ状の工具によって底部外面に「大」と刻書されている。

(3) 石製品（第9図34～40）

本調査地点からは、五輪塔・宝篋印塔などの石製品が75点出土した。内分けは五輪塔が72点（空風輪37点・火輪12点・水輪20点・地輪3点）、宝篋印塔が2点（相輪1点・塔身1点）、不明石製品が1点であった。これら石製品は、SP10の黒褐色砂層、SP16・17の黒褐色粘土層、SP18・21・22・24の暗灰色弱粘性土層、SP26の黒～茶褐色粘土層から出土している。出土した石製品のうち、一部は建築資材として転用された可能性もあるが、不規則に集積されたものが多数であり、また資材として転用しにくい空風輪が多く存在することから、江戸期に廃棄された可能性が高いと考えられる。

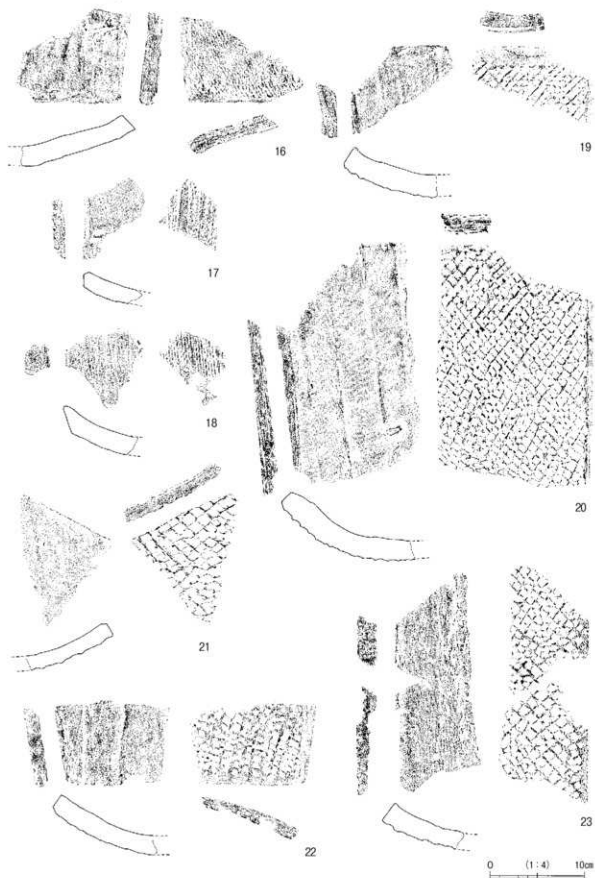
出土した五輪塔の中で記録が確認できたのはいずれも空風輪であった。「南無」と記録されているのが3点で、35は赤色塗料が残存していた。37～39は東方発心門の空風輪種字である「キャ」「カ」が刻まれていた。40は宝篋印塔の塔身で、四面に金剛界大日如來の「バン」が刻まれていた。また、空風輪の中には墨書が記されているものがあつたが、判読はできなかった。



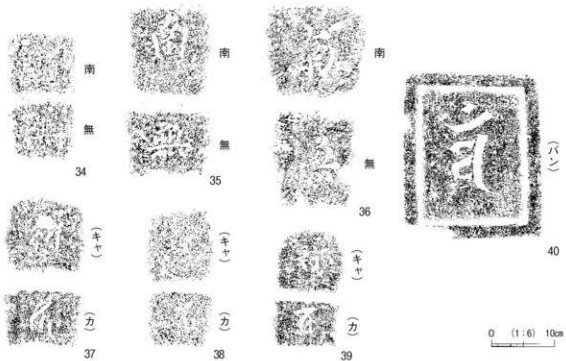
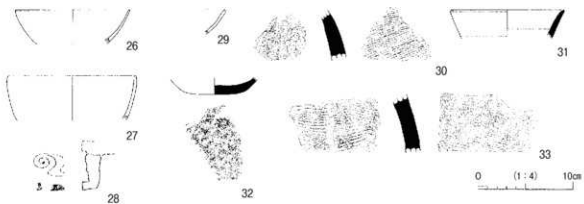
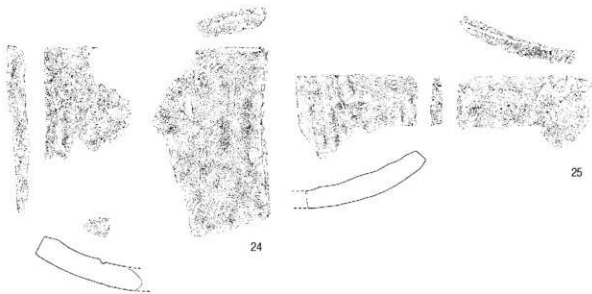
第6圖 出土遺物（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦）



第7図 出土遺物 (丸瓦・平瓦)



第8圖 出土遺物(平瓦)



第9図 出土遺物 (平瓦・陶磁器・土師器・須恵器・石製品)

図面No	種別	法量 (cm)		色調	焼成	特徴	出土地点
		直径	厚さ(瓦当部)				
1	軒丸瓦	14.8	1.5~2.3	5YR4/1黒灰	良(還元焼)	復弁八弁差草文・凸部両文・中房差子=1+4+8(四房有)・范係少	4Tr・SP48(IV層)
2	軒丸瓦	16.4(推定)	1.9~2.2	10R5.6赤	良(生焼け?)	復弁八弁差草文・凸部両文・中房差子=1+4+8(四房有)・方形の范係が流行	4Tr一括(IV層)

図面No	種別	法量 (cm)		色調	焼成	特徴	出土地点
		直径	厚さ(平瓦部)				
3	軒平瓦	6.0	—	2.5YR5.6赤黒	良(生焼け?)	御内書草文・段摺?・頸部・頸部はケズリ調整・軒平4と同一個体?	4Tr一括(IV層)
4	軒平瓦	2.5(推定)	—	5YR6/4に赤い粉	良(生焼け?)	御内書草文・段摺?・頸部はケズリ調整・軒平3と同一個体?	4Tr一括(IV層)
28	軒平瓦	1.1~1.5	—	5Y7/1灰白	良(焼じ)	近世瓦・或本文?模索文?	2Tr・SP15(II層)

図面No	種別	厚さ (cm)	色調	焼成	凹面	凸面	調整回数(ケズリ)		備考	出土地点
							側部	底部		
5	丸瓦	1.4	10YR8.3/浅黄緑	やや良	布目肌	ヨコナデ	3	2		4Tr一括
6	丸瓦	1.4	10YR8.4/浅黄緑	やや良	布目肌・布縞じ目	ヨコナデ	3	2		4Tr一括
7	丸瓦	1.4	N7/灰白	良(還元焼)	布目肌・布縞じ目	ヨコナデ	3	2		4Tr一括
8	丸瓦	1.3	N6/灰	良(還元焼)	布目肌・布ヨレ	ヨコナデ	2	2		4Tr一括
9	丸瓦	2.4	N2/黒	やや良(還元焼)	布目肌	ヨコナデ・タテナデ	3	2		4Tr一括
10	丸瓦	1.1	N4/灰	やや良(還元焼)	布目肌・布縞じ目	ヨコナデ・分割線あり?	3	—		4Tr一括
11	丸瓦	1.7	2.5Y5.1黄灰	やや良(還元焼)	布目肌・布縞じ目・輪積み肌?	ヨコナデ?	3	2		4Tr一括
12	平瓦	1.8	5Y8/1灰白	良(還元焼)	布目肌・ハゲ目?・模骨肌?	純叩き	2	2		4Tr一括
13	平瓦	2.1	2.5Y7/1灰白	良(還元焼)	布目肌・赤切肌・模骨肌	純叩き	1	1		4Tr一括
14	平瓦	1.8	N4/灰	良(還元焼)	布目肌(不明瞭)・赤切肌	純叩き	2~3	2		4Tr一括
15	平瓦	2.0	2.5Y6.1黄灰	良(還元焼)	布目肌・赤切肌・模骨肌・輪積肌	純叩き	1	1		4Tr一括
16	平瓦	2.0	7.5YR6.3/赤い粉	やや良	布目肌	純叩き	2	3~4		4Tr一括
17	平瓦	1.8	5Y7/1灰白	やや不良	布目肌	純叩き	2	—		4Tr一括
18	平瓦	1.9	7.5YR7/4に赤い粉	やや不良	布目肌	純叩き	3	—		4Tr一括
19	平瓦	2.4	10YR8.4/浅黄緑	良	布目肌・模骨肌	格子目叩き	3	3		4Tr一括
20	平瓦	2.1	7.5YR8.6/浅黄緑	良	布目肌・模骨肌	格子目叩き	3	2		4Tr一括
21	平瓦	1.5	10YR8.4/浅黄緑	やや良	布目肌・模骨肌	格子目叩き	—	1	隅切瓦	4Tr一括
22	平瓦	1.9	10YR8.4/浅黄緑	良	布目肌・模骨肌・布縞じ目	格子目叩き	3	2		4Tr一括
23	平瓦	1.9	N4/灰	良(還元焼)	布目肌・赤切肌・模骨肌	格子目叩き	2	—		4Tr一括
24	平瓦	2.4	2.5Y7/1灰白	やや良(還元焼)	布目肌・布縞じ目・輪積み肌?ナデ	タテナデ(指紋多数)	3	2(?)		4Tr一括
25	平瓦	2.3	2.5Y6.1黄白	やや不良	布目肌・ナデ	ヨコナデ(一部に平行叩き残存)	3	3		4Tr一括

図面No	種別	器種	色調(土色)	成形	絵付種類	法量 (cm)			外面	内面	底部	推定産地	推定年代	備考	出土地点		
						口径	器高	底径									
26	陶器	小碗	白色	輪轆	伏頭・透明釉	(12.2)	(3.6)	—	—	—	—	瀬戸・美濃系	1880~1910	被熱	1Tr・SP5 (I層3)		
27	陶器	碗	白色	輪轆	透明釉(コバルト)	(13.6)	(4.7)	—	—	—	—	肥前系	1650~1690		1Tr・SP5 (II層9)		
29	土師器	坏	—	—	—	—	(2.6)	—	—	—	—	在地系	不明		3Tr・SP45 (III層9・IV層10)		
30	陶器	壺	5Y5.1灰	叩き	—	—	—	—	平行叩き	—	—	珠洲系	13~15C		3Tr・SP44 (I層9)		
31	須恵器	坏	7.5Y6/1灰	輪轆	—	(12.0)	(3.1)	—	—	—	—	不明	不明		4Tr一括		
32	須恵器	坏	7.5Y6/1灰	輪轆	—	—	(1.8)	—	—	—	—	ナデ	ヘラ削り	不明	7~8C	底部へラ跡が[大]	3Tr・SP45 (IV層10)
33	須恵器	壺	2.5Y7/1灰	叩き	—	—	—	—	平行叩き	—	—	不明	不明	不明	不明	4Tr一括	

図面No	石製品内容		石材	寸法 (cm)			備考
	種別	部位・形状		ナデ	ヨコ1	ヨコ2	
34	五輪塔	空風輪	安山岩(青目)	21.0	17.5	16.0	記名「南無」
35	五輪塔	空風輪	安山岩(青目)	28.5	24.5	20.0	記路「南無」(朱字)
36	五輪塔	空風輪	安山岩(青目)	32.5	25.0	23.0	記路「南無」
37	五輪塔	空風輪	安山岩(青目)	23.5	19.5	17.0	記路(東方覺心門の空風輪種字)
38	五輪塔	空風輪	安山岩(赤目)	21.0	16.5	16.0	記路(東方覺心門の空風輪種字)
39	五輪塔	空風輪	安山岩(青目)	19.5	15.0	14.5	孔あり・記路(東方覺心門の空風輪種字)
40	宝篋印塔	塔身	安山岩(青目)	26.5	21.5	22.0	西面に種子(金剛界大日如來)

石製品観察表

番号	石製品内容		石材	寸法 (cm)			備考
	種別	部位・形状		タテ	ヨコ1	ヨコ2	
1	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	16.0	12.5	11.5	
2	五輪塔	空風輪	安山岩 (赤目)	16.5	14.0	12.5	
3	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	17.5	13.5	13.0	
4	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	20.0	14.5	14.5	
5	五輪塔	空風輪	安山岩 (赤目)	18.0	13.0	12.5	
6	五輪塔	空風輪	安山岩 (赤目)	18.0	14.5	12.0	
7	五輪塔	空風輪	安山岩 (赤目)	18.0	13.5	12.0	
8	五輪塔	空風輪	安山岩 (赤目)	17.0	14.5	13.5	種子(?) 彫書
9	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	21.5	16.5	15.0	
10	五輪塔	空風輪	安山岩 (赤目)	19.0	15.5	14.5	
11	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	20.5	16.5	15.0	
12	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	(20.5)	16.0	14.0	
13	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	21.0	16.5	15.0	窪みあり
14	五輪塔	空風輪	安山岩 (赤目)	20.5	15.5	13.0	
15	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	20.0	15.5	14.5	孔?
16	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	19.0	16.5	14.0	
17	五輪塔	空風輪	輝花凝灰岩系	20.5	17.0	16.0	
18	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	19.0	15.5	14.5	被熱?
19	五輪塔	空風輪	安山岩 (赤目)	18.5	16.0	14.5	
20	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	(21.5)	17.0	15.5	
21	五輪塔	空風輪	安山岩 (赤目)	24.0	17.5	16.5	彫書「南無」
22	五輪塔	空風輪	安山岩 (赤目)	23.0	19.5	16.0	
23	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	22.0	18.0	15.0	
24	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	25.5	19.0	15.0	被熱?
25	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	20.5	17.0	15.0	
26	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	(19.0)	17.0	15.5	被熱?
27	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	(24.5)	19.5	17.0	
28	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	24.0	18.0	15.5	
29	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	19.5	16.5	15.0	
30	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	(13.5)	18.0	—	風輪欠損
31	五輪塔	空風輪	安山岩 (青目)	25.0	20.0	19.5	
32	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目)	13.0	9.5	21.0	
33	五輪塔	火輪	安山岩 (青目)	10.5	10.0	19.0	
34	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目)	12.5	9.5	21.0	
35	五輪塔	火輪	安山岩 (青目)	15.0	11.0	24.0	
36	五輪塔	火輪	安山岩 (青目)	13.5	11.0	26.0	
37	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目)	14.5	8.0	18.0	
38	五輪塔	火輪	安山岩 (青目)	19.0	16.0	30.0	
39	五輪塔	火輪	安山岩 (青目)	14.0	11.0	23.0	
40	五輪塔	火輪	安山岩 (青目)	16.5	13.5	(23.0)	
41	五輪塔	火輪	安山岩 (青目)	15.0	10.5	22.0	孔あり
42	五輪塔	火輪	安山岩 (青目)	13.0	9.5	21.5	孔あり
43	五輪塔	火輪	安山岩 (青目)	20.5	13.5	27.0	窪みあり
44	五輪塔	水輪	安山岩 (青目)	16.5	17.0	24.0	被熱?
45	五輪塔	水輪	安山岩 (赤目)	14.0	13.5	21.0	
46	五輪塔	水輪	安山岩 (青目)	15.5	14.0	22.0	
47	五輪塔	水輪	輝花凝灰岩系	13.5	10.0	18.0	
48	五輪塔	水輪	安山岩 (青目)	13.0	10.0	19.5	
49	五輪塔	水輪	安山岩 (青目)	15.0	14.0	22.0	
50	五輪塔	水輪	安山岩 (赤目)	12.0	13.0	19.5	

番号	石製品内容		石材	寸法 (cm)			備考
	種別	部位・形状		タテ	ヨコ1	ヨコ2	
51	五輪塔	水輪	安山岩 (青目)	12.0	12.0	18.5	
52	五輪塔	水輪	安山岩 (赤目)	12.0	17.0	20.5	
53	五輪塔	水輪	輝花凝灰岩系	(10.5)	11.0	(19.0)	
54	五輪塔	水輪	安山岩 (青目)	15.0	16.0	23.0	
55	五輪塔	水輪	安山岩 (青目)	12.5	13.0	19.5	
56	五輪塔	水輪	輝花凝灰岩系	18.0	14.0	24.0	
57	五輪塔	水輪	安山岩 (青目)	15.0	17.0	22.5	
58	五輪塔	水輪	安山岩 (青目)	12.0	14.0	21.0	
59	五輪塔	水輪	輝花凝灰岩系	12.0	(11.0)	17.5	
60	五輪塔	水輪	安山岩 (青目)	13.5	17.0	22.0	
61	五輪塔	水輪	安山岩 (青目)	16.5	17.0	(16.0)	
62	五輪塔	水輪	輝花凝灰岩系	19.0	14.0	24.0	
63	五輪塔	水輪	安山岩 (青目)	19.5	24.0	31.0	被熱?
64	五輪塔	地輪	輝花凝灰岩系	13.0	19.0	(12.0)	
65	五輪塔	地輪	輝花凝灰岩系	(16.5)	—	(22.5)	
66	五輪塔	地輪	安山岩 (青目)	18.5	24.5	(25.5)	被熱?
67	宝篋印塔	相輪	安山岩 (赤目)	(14.5)	10.5	—	
68	(不明)	安山岩 (赤目)					五輪塔空風輪?

※1 寸法の () は現存部分のみの長さを示す。

※2 寸法の「タテ」は製品の高さを示し、「ヨコ1」「ヨコ2」は部位ごとに異なる。

以下、「各部位(ヨコ1:ヨコ2)」

・五輪塔

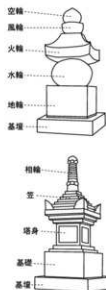
空風輪(空輪最大径:風輪最大径)、火輪(上部辺:下部辺)

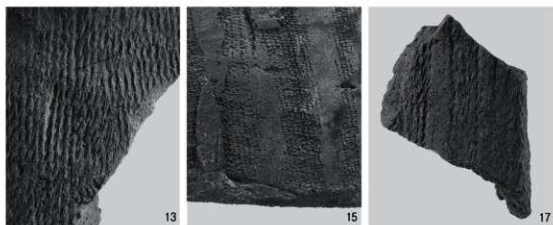
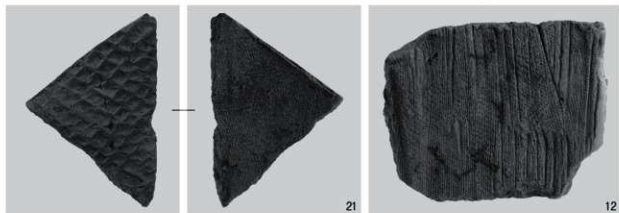
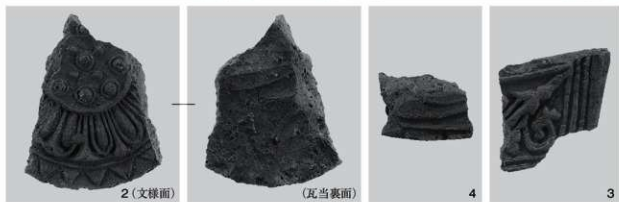
水輪(上部径:最大径)、地輪(上部辺:下部辺)

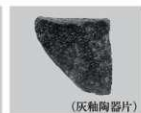
・宝篋印塔

相輪(中央部径:底部部径)、塔身(前部径:側部径)

●石造物名称







(灰釉陶器片)



37



38



39



8



21



68



40



空風輪



火輪



水輪・地輪

第Ⅳ章 結 語

第1節 凸鋸齒文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦の範傷進行と製作技法

これまで元善町および周辺部からは、数種類の古代軒瓦が確認されている。中でも、今回の調査でも出土している凸鋸齒文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦（以下、複弁蓮華文軒丸瓦）は、多数出土しており、浅川扇状地遺跡群から出土した資料を加えると、合計で17点を数える（表参照）。出土資料の集積・比較検討の結果、瓦当文様が同範であること、その範傷が段階を追って進行していること、また瓦当部と丸瓦部との接合位置が範傷の進行段階によって微妙に異なることが判明した。本節では、現在までに確認されている複弁蓮華文軒丸瓦の資料集積とあわせて、確認できた範傷の進行および瓦当接合部位置に関して、段階ごとに述べることにする。

【第1段階】（第10図1・2・3） 範傷がほとんどみ

られない個体。花卉が単弁になっている箇所と、外区凸鋸齒文縁の計二箇所に見られるが、それ以外には目立った範傷はない。また、この段階においては文様の上下が定まっていないと思われる。

【第2段階】（第10図4・5・6） 単弁の隣の複弁に、方形の範傷が現れる。また、第1段階の範傷も確認できている。残存率が低いのが、この段階においても文様の上下は定まっていない。

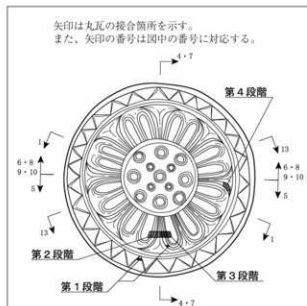
【第3段階】（第10図7・8） 複弁の方形の範傷が単弁にまで達し、長方形となる。この段階においても、文様の上下は定まっていないものと思われる。

【第4段階】（第10図9・10） 長方形の範傷に変化はないが、細かい範傷が各所で見られるようになる。この段階において、文様の上下は長方形の範傷を下にして定まったものと思われる。

11~17は、小破片であることや明確な範傷が確認できなかったため、範傷の進行段階は不明である。ただし、13に関しては、範傷は確認できなかったが、単弁をほぼ真上にして丸瓦と接合しているため、第1段階から第3段階のいずれかに該当するものと思われる。

資料集積によって、大きく第4段階での範傷進行を確認することができた。ただし、現時点ではこの複弁蓮華文軒丸瓦の製作時期を限定できる資料は確認されていない。そのため、瓦当範の使用期間の長短も、現時点では判断がつかない。ここでは、現在までに確認されている複弁蓮華文軒丸瓦の瓦当は、全て同じ範によって製作されており、今後元善町遺跡や瓦窯跡等での出土例が増加すれば、範傷の進行段階と出土地点との相関関係によって、何らかの傾向が見出せる可能性があることを指摘しておきたい。

製作技法に関しては第3章第2節でも一部述べたが、確認できた個体に関して共通していることは、丸瓦の端部にへら状の工具で刻み（×状）を入れて瓦当面と接合している点が挙げられる。また、丸瓦と都合する前段階において、瓦当范に1cmほどの粘土を先に敷き詰め、丸瓦接合後に新たに1cm程の粘土を盛り、接合部分を補強している点も共通している。



範傷・接合箇所模式図

今回の調査の結果、確認できた複弁蓮華文軒丸瓦が同范であることや、技法にある程度の共通性を見出すことが出来たことによって、元善町遺跡および牟礼バイパス地点出土の複弁蓮華文軒丸瓦が、同一の造瓦工人集団によって生産されたものである可能性が指摘できる。今後は、これまでの調査で出土している他の文様を有する軒丸瓦や、複弁蓮華文軒丸瓦とセットとなる軒平瓦等との関係性を考慮する必要がある。范傷の進行段階は、あくまでも現時点の集積であり、今後中間を埋める個体や、さらなる初現的な個体が出土する可能性もある。元善町遺跡や瓦生産に関連する遺跡の調査が進み、さらなる資料の集成と検討を重ね、古代長野盆地における瓦の生産・流通体制がより明確になることが望まれる。

第2節 鷗尾の出土

本節は今回の調査とは直接的な関係はないが、資料集成・精査の段階で大脇謙（近畿大学教授）・上原真人（京都大学大学院教授）両氏に市内出土の仏教関連遺物を実見していただいた結果、既刊報告書の掲載遺物について修正すべき点があるとのこと指摘を受けたため、以下に修正報告をさせていただく。

(1) 浅川扇状地遺跡群二ツ宮遺跡 FM2区13号溝址出土鷗尾片（第11図18）

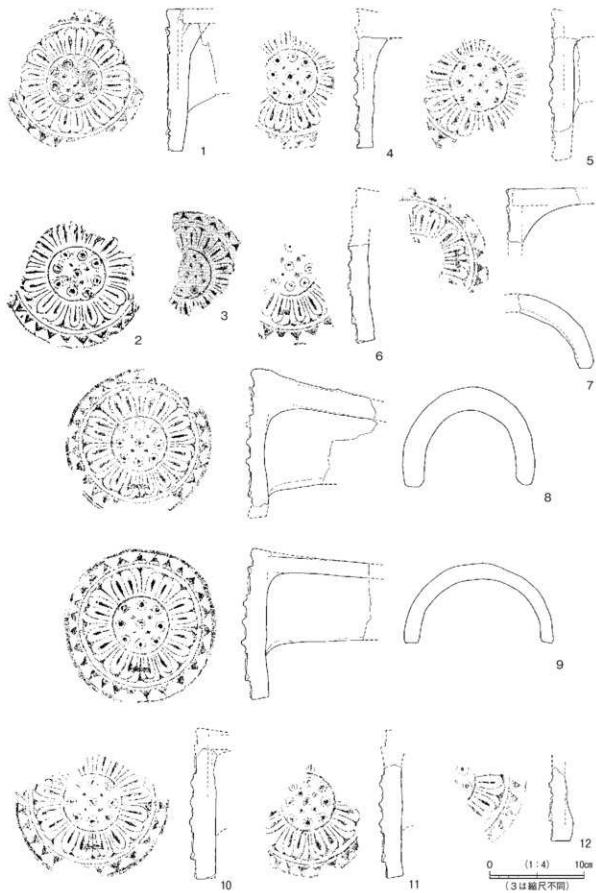
昭和61年～平成3年にかけて、長野市稲田・徳間土地区画整理事業に伴って実施された調査の中で、平成2年に行われた二ツ宮遺跡（FM2区13号溝址）から瓦製鷗尾破片が出土したと報告されている。出土した破片は鷗尾の鰭部分とみられ、7世紀後半のものによく見られる調整痕を持ち、溝の伴遺物から奈良時代後半には廃棄されたと述べられている。この遺物に関して、大脇・上原両氏は実見の結果、鷗尾の鰭部分である可能性は極めて低いとの見解であった。形状から移動式カマドの可能性も考えられるが、現時点では不明土製品として扱うこととする。

二ツ宮遺跡において、当時鷗尾として扱われた不明土製品は、同じ浅川扇状地遺跡群稲添遺跡出土の瓦塔と共に注目され、稲田・徳間地区に古代寺院が存在していたことを推定する根拠とされてきた。確かに同地区においては、数点ではあるが瓦片も確認されているため、瓦葺建物が存在した可能性も否定はできないが、鷗尾の存在を外して考えると積極的に肯定する要素も低い状況である。現時点では、同地区の集落が仏教思想を有していた、あるいは寺院等に関連する集落であった程度の認識が妥当と判断される。

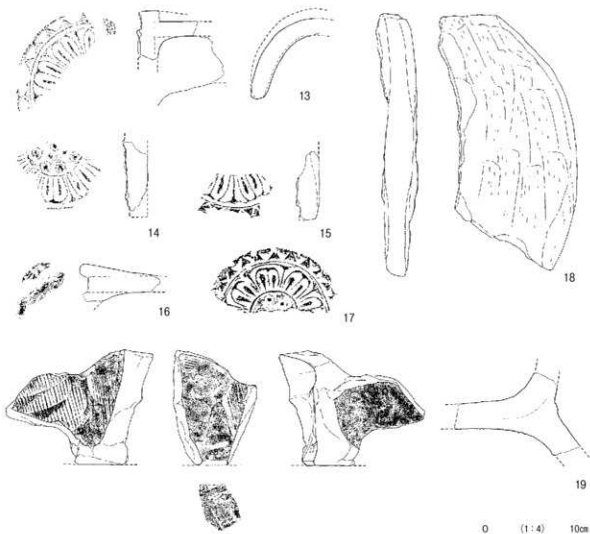
(2) 長野遺跡群善光寺門前町跡竹風堂善光寺大門店地点 区面溝出土道具瓦片（第11図19）

平成18年度に、長野市大門町において竹風堂善光寺大門店の建設に伴って実施された調査である。道具瓦片は、調査区の東西に伸びる中世の区画溝から出土しており、報告書内では棟に使う道具瓦と述べられている。この遺物に関して、大脇・上原両氏は実見の結果、鷗尾の胴部と鰭部の接合部分にあたるもので、布目痕がある面が底面であるとの見解であった。今回は改めて再実測をし、図面を掲載することとする。

出土した鷗尾片は、胴部外面と鰭部に平行叩き具による成形痕が残存しており、内面には指頭圧痕や指ナデの痕がみられるが、当て具痕の形跡は見当たらない。また、破片を上から見ると、胴部に対して鰭部が「八」字状に広がって接合されている。この道具瓦が鷗尾で、門前町跡から出土したということは、元善町近辺に存在していたとみられる古代瓦葺き建物は、鷗尾を有する建物であった可能性が指摘できる。今後、他地域の鷗尾との比較を通して、本出土品の位置付けを行うとともに、元善町近辺に存在したであろう古代瓦葺き建物の性格についても検討する必要がある。



第10図 凸鋸歯文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦 (2は長野県1988、3は米山1954より転載)



第11図 凸歯歯文線複弁八弁蓮華文軒丸瓦・不明土製品・鶴尾 (17は長野県1988より転載)

No.	法量 (cm)			色調	出土地	確認年	確認要因	所管	備考
	直径	厚さ (瓦面部)	厚さ (丸瓦)						
1	14.8	1.5~2.3	—	5YR4/1赭灰	善光寺仲見掛通り	2008	発掘調査	長野市埋蔵文化財センター	
2	—	—	—	—	長野市下田子集沢家跡	1916	表採?	—	長野県1988・米山1954 に掲載
3	—	—	—	—	善光寺仁王門北東	1953	水道工事	—	米山1954に掲載
4	(14.8)	1.4~2.1	—	10YR5/2灰黄褐	長野市若槻車札バインD地点	1984-85	発掘調査	長野市埋蔵文化財センター	
5	(16.0)	2.0~2.6	—	7.5YR7/4Lぶい黄橙	善光寺仁王門北東	1953	水道工事	善光寺事務局	
6	(16.4)	1.9~2.2	—	10YR 5/赤	善光寺仲見掛通り	2008	発掘調査	長野市埋蔵文化財センター	
7	14.6	1.5~1.7	1.7~1.9	5Y4/1灰	善光寺仁王門北東	1953	水道工事	善光寺事務局	
8	15.4	1.5~2.0	2.2	N1.5/黒	善光寺境内	1955?	掘削工事?	長野市立博物館	市博に寄贈 (1987)
9	15.9	2.3~2.7	1.6	2.5Y7/2灰黄	善光寺玉照院前	1957	電話調査	長野市立博物館	
10	16.0	2.5	—	10YR7/4Lぶい黄橙	長野市若槻車札バインC地点	1984	発掘調査	長野市埋蔵文化財センター	
11	15.6	1.6~2.5	—	5Y5/1灰	善光寺仁王門北東	1953	水道工事	善光寺事務局	
12	(16.0)	1.5~2.0	—	5YR7/6橙	善光寺境内	—	—	—	長野県1988に掲載
13	(16.0)	1.7~1.8	1.6~1.8	7.5YR7/6橙	善光寺境内	—	—	—	初掲載
14	(15.4)	2.3	—	7.5Y1/7R白	長野市西長野	—	—	長野市立博物館	長野県1988に掲載
15	(16.2)	1.8~2.4	—	7.5YR8/6浅黄橙	善光寺大本願明照院地点	2007	発掘調査	長野市埋蔵文化財センター	
16	(16.0)	—	1.6	7.5YR6/6橙	善光寺仁王門東地点	2007	発掘調査	長野市埋蔵文化財センター	
17	—	—	—	—	善光寺本堂東脇	1952	掘削工事	—	長野県1988・米山1954 に掲載



4



5



7



8



9



10



11



12



13



14



19

参考文献

- 飯島 哲也 1997 「科野の飛鳥・白鳳期寺院」『古代寺院の出現とその背景1』埋蔵文化財研究会
- 井原今朝雄 1988 「中世善光寺の一考察—長野県史花園遺構調査報告5—」『信濃』40-3
- 井原今朝男・福島正樹・牛山佳幸ほか 2000 『長野市誌』（第2巻歴史編 原始・古代・中世）長野市誌編さん委員会
- 井原今朝男 2002 「中世善光寺平の災害と開発—開発勢力としての伊勢平氏と越後平氏」
- 上田市立信濃国分寺資料館 2005 「信濃の古代・中世の仏教文化と関係遺跡」
- 牛山 佳幸 1991 「信濃善光寺史関係文獻目録」『寺院史研究』2
- 牛山 佳幸 1991 「善光寺創建と善光寺信仰の発展」『善光寺 心とかたち』第一法規出版
- 牛山 佳幸 1996 「信濃善光寺史関係文獻目録補遺（その1）」『寺院史研究』5
- 牛山 佳幸 1996 「中世律宗の地域的展開—信濃国の場合—」『信濃』48-9
- 牛山 佳幸 1997 「『善光寺縁起』の成長」『古代・中世人の祈り—善光寺信仰と北信濃—』長野市立博物館
- 牛山 佳幸 1999 「中世武士社会と善光寺信仰」『鎌倉時代の社会と文化』東京堂出版
- 風間 栄一 2000 「科野・善光寺平における渡来系集団とその動向」『月刊考古学ジャーナル』459
- 倉澤 正幸 2004 「上田地方における古代仏教関係資料の考察」『信濃』56-9
- 倉澤 正幸 2008 「古代信濃における軒瓦の一考察—信濃国分寺跡他出土軒瓦の検討—」『長野県考古学会誌126』
- 小林計一郎 2000 『善光寺史研究』信濃毎日新聞社
- 小林 敏男 1999 「善光寺と若麻積氏」『信濃』51-8
- 坂井 衡平 1969 『善光寺史』東京美術
- 笹本 正治 1999 「中世末から近世初頭の善光寺門前町」『国立歴史民俗博物館研究報告』78
- 清水 保 1950 「善光寺研究における二・三の問題」『信濃』2-12
- 塚田一夫ほか 1980 『長野市元善町誌 善光寺門前町百年の歩み』元善町誌編集委員会
- 長野県 1988 『長野県史』長野県史刊行会
- 長野市教育委員会 1986 『浅川扇状地遺跡群—幸礼バイパスB・C・D地点—』長野市の埋蔵文化財第17集
- 長野市教育委員会 1992 「二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡」長野市の埋蔵文化財第47集
- 長野市教育委員会 2006 『善光寺門前町跡—竹風堂善光寺大門町店地点—』長野市の埋蔵文化財第115集
- 長野市教育委員会 2008 「元善町遺跡・善光寺門前町跡②」長野市の埋蔵文化財第121集
- 長野市立博物館 1985 『善光寺信仰』
- 原田 和彦 1994 「千曲川流域における古代寺院—研究の前提として—」『長野市立博物館紀要』2
- 原田 和彦 1997 「古代善光寺をめぐる」『長野』191
- 原田 和彦 2001 「善光寺平の官衙研究をめぐる諸問題」『信濃』53-11
- 福島 正樹 2002 「古代における善光寺平の開発について—旧長野市街地の条里遺構を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』96
- 古川貞雄・福島正樹・井原今朝男・青木歳幸・小平千文 1997 『長野県の歴史』山川出版社
- 森 郁夫 1986 「古代信濃の畿内系軒瓦—国分寺造営期を中心として—」『信濃』38-9
- 森島 稔ほか 1976 『長野県土木内郡誌 歴史編』土木内郡誌編集会
- 湯本軍一・井原今朝男・小林計一郎ほか 1986 『長野県史』（通史編2中世1）長野県史刊行会
- 大和 岩雄 1990 『信濃古代史考』名著出版
- 米山 一致 1954 「善光寺瓦と善光寺の草創」『地方研究論叢』一志茂樹博士還暦記念会
- 米山 一致 1971 「信濃の古瓦」『一志茂樹博士喜寿記念論集』一志茂樹博士喜寿記念会
- 米山 一致 1978 「信濃出土の古瓦再論」『中部高地の考古学』長野県考古学会
- 米山 一致 1996 「信濃史の諸問題と善光寺・戸隠」信濃毎日新聞社

報告書抄録

ふりがな	ながのいせきくん もとよしちょういせき							
書名	長野遺跡群 元善町遺跡(2)							
副書名	—善光寺仲見世通りガス管布設工事地点—							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第123集							
編著者名	宿野隆史・柴田洋孝							
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004							
発行年月日	2009(平成21)年3月27日							
印刷所	鬼灯書籍株式会社(〒381-0012 長野市柳原2133-5 TEL 026-244-0235)							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
元善町遺跡 (2)	長野県長野市大字長野字 元善町482,484～486番先	20201	C-003	36° 39' 31"	138° 11' 15"	20080317) 20080403	90㎡	ガス管 布設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
元善町遺跡 (2)	社寺	古代) 近世	礎石状遺構	軒丸瓦、軒平瓦 陶磁器、土器、須恵器 五輪塔など		複弁八弁蓮華文軒丸瓦 偏行唐草文軒平瓦		

長野市の埋蔵文化財 発掘調査報告書一覧

1968年	第1集	【信濃長原古墳群】	1995年	第67集	【浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡Ⅱ】
1976年	第2集	【浅川西集】	第68集	【栗田城跡(3)】	
1978年	第3集	【中村遺跡】	第69集	【浅川扇状地遺跡群 徳間本堂原遺跡】	
	第4集	【塩崎遺跡群】	第70集	【八幡田沖遺跡】	
1979年	第5集	【塩崎遺跡群(2)】	第71集	【浅川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡(2)・吉田町東遺跡】	
1980年	第6集	【三輪遺跡 一付水内堂一元神社遺跡】	第72集	【塩崎遺跡群(8)・石川糸里遺跡(9)】	
	第7集	【田中沖遺跡】	第73集	【松代城跡】	
	第8集	【藤ノ井遺跡群】	第74集	【松代城跡Ⅱ】	
	第9集	【四ツ屋遺跡(第1～3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)】	1996年	第75集	【浅川扇状地遺跡群 吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡(6)・栗河原遺跡】
1981年	第10集	【湯谷古墳群・長孔山古墳群・駒沢町遺跡】	第76集	【浅川扇状地遺跡群 駒沢城跡・小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅱ】	
	第11集	【新清水遺跡・大塚遺跡・大清水遺跡】	第77集	【浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡】	
1982年	第12集	【浅川扇状地遺跡群 一平礼バイパスA・B地点】	第78集	【奉徳塚1号古墳・2号古墳】	
1983年	第13集	【浅川扇状地遺跡群 淵田遺跡・川田糸里の遺跡・石川糸里の遺跡】	第79集	【松尾山遺跡】	
1984年	第14集	【石川糸里の遺跡(2)・上駒沢遺跡】	第80集	【小島・柳原遺跡群 水内堂一元神社遺跡Ⅱ】	
	第15集	【新清水遺跡(2)】	第81集	【新花川扇状地遺跡群 村布遺跡】	
1985年	第16集	【石川糸里の遺跡(3)・(付上駒沢遺跡)】	第82集	【浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡Ⅱ】	
1986年	第17集	【浅川扇状地遺跡群 一平礼バイパスB・C・D地点】	第83集	【下箕ヶ谷遺跡】	
	第18集	【塩崎遺跡群Ⅱ 市道松路一小田井神社地点遺跡】	第84集	【浅川扇状地遺跡群 吉田古厩敷遺跡】	
1987年	第19集	【土口村集落古墳 重要遺跡確認調査報告書一】	第85集	【上九反遺跡】	
	第20集	【三輪遺跡(2)】	第86集	【新花川扇状地遺跡群 寺村遺跡】	
	第21集	【岸田小学校遺跡】	1998年	第87集	【長野野遺跡群 西町遺跡】
	第22集	【長野吉田高校グラウンド遺跡】	第88集	【小島柳原遺跡群 水内堂一元神社遺跡Ⅲ】	
1988年	第23集	【横田遺跡群 富士宮遺跡】	第89集	【新花川扇状地遺跡群 尾形城跡】	
	第24集	【塩崎遺跡群Ⅴ 殿原向遺跡】	第90集	【西前山古墳】	
	第25集	【小島柳原遺跡群 南川内遺跡】	第91集	【新花川扇状地遺跡群 西方遺跡・中沢城跡】	
	第26集	【東香場遺跡】	第92集	【松原遺跡Ⅴ】	
	第27集	【小栗見城跡】	第93集	【栗河原遺跡(2)・田中沖遺跡Ⅱ】	
	第28集	【宮崎遺跡】	第94集	【浅川扇状地遺跡群 小坂原遺跡】	
	第29集	【浅川扇状地遺跡群 浅川端遺跡】	1999年	第95集	【稲内遺跡群 高野遺跡】
	第30集	【地蔵山古墳群】	2000年	第96集	【南宮遺跡Ⅱ】(第1分冊・遺構編)
	第31集	【岡川遺跡】	2001年	第96集	【南宮遺跡Ⅱ】(第2分冊・遺物編)
1989年	第32集	【中条遺跡】	第97集	【長野吉田高校グラウンド遺跡Ⅱ】	
	第33集	【横前遺跡】	第98集	【田田氏館跡・岩崎遺跡Ⅱ】	
	第34集	【石川糸里遺跡(4)】	第99集	【浅川扇状地遺跡群 徳間横田遺跡】	
	第35集	【藤ノ井遺跡群Ⅱ】	2002年	第96集	【南宮遺跡Ⅱ】(第3分冊・写真編)
1990年	第36集	【原田遺跡Ⅱ】	第100集	【四ツ屋遺跡Ⅱ】	
	第37集	【藤ノ井遺跡群Ⅲ】	第101集	【藤ノ井遺跡群(5)】	
1991年	第38集	【栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)】	2003年	第102集	【浅川端遺跡(2)・流出遺跡 三合塚西古墳・石川糸里遺跡(10)】
	第39集	【塩崎遺跡群(6)・石川糸里遺跡(5)】	2004年	第103集	【藤ノ井南条遺跡・浅川扇状地遺跡群 辰巳池遺跡・本郷前遺跡】
	第40集	【松原遺跡】	第104集	【浅川扇状地遺跡群 天神木遺跡・樋爪遺跡・権現堂遺跡】	
	第41集	【小島柳原遺跡群 中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群 押除遺跡・極田遺跡】	第105集	【浅川扇状地遺跡群 横田遺跡(2)】	
1992年	第42集	【田中沖遺跡Ⅱ】	2005年	第106集	【稲内遺跡群 青免遺跡】
	第43集	【南宮遺跡】	第107集	【新花川扇状地遺跡群 西方遺跡(2)】	
	第44集	【塩崎遺跡群(7)】	第108集	【浅川扇状地遺跡群 朝原宮西遺跡・権現堂遺跡(2)・吉田古厩敷遺跡(2)・池貝遺跡】	
	第45集	【石川糸里遺跡(6)】	第109集	【松代城下町跡】	
	第46集	【藤ノ井遺跡群(4)】	第110集	【松代城下町跡(2)】	
	第47集	【浅川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡・本郷遺跡・柳田遺跡・結話遺跡】(2分冊)	第111集	【石川糸里遺跡(11)・浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡(3)・上長原遺跡】	
	第48集	【小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅱ】	2006年	第112集	【浅川扇状地遺跡群 吉田町東遺跡(2)】
1993年	第49集	【浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(4)】	第113集	【小島・柳原遺跡群 水内堂一元神社遺跡(4)】	
	第50集	【浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡】	第114集	【松代城下町跡(3)】	
	第51集	【松原遺跡Ⅱ】	第115集	【善光寺門前町跡】	
	第52集	【田代坊遺跡】	2007年	第116集	【平林東沖遺跡】
	第53集	【宮崎遺跡】	第117集	【藤ノ井遺跡群(6)】	
	第54集	【吉町遺跡(成人塚)】	第118集	【吉田古厩敷遺跡(3)】	
	第55集	【浅川扇状地遺跡群 駒沢町遺跡Ⅱ】	第119集	【吉田古厩敷遺跡(4)・田代坊遺跡(2)】	
	第56集	【上見林遺跡】	2008年	第120集	【吉田古厩敷遺跡(5)】
	第57集	【石川糸里遺跡(7)】	第121集	【元善町遺跡・善光寺門前町跡(2)】	
	第58集	【松原遺跡Ⅲ】	第122集	【ニツ宮遺跡(3)・浅川端遺跡(3)】	
	第59集	【史跡松代藩土真田家墓所】			
1994年	第60集	【藤平遺跡・宮ノ下遺跡】			
	第61集	【栗田城跡(2)】			
	第62集	【浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(5)・小島柳原遺跡群 上中島遺跡】			
	第63集	【松原遺跡Ⅳ】			
	第64集	【小島柳原遺跡群 宮西遺跡】			
	第65集	【浅川扇状地遺跡群 半礼バイパスB地点遺跡(2)】			
	第66集	【石川糸里遺跡(8)】			

長野市の埋蔵文化財第123集

長野遺跡群

元善町遺跡(2)

—善光寺仲見世通りガス管付設工事地点—

平成21年3月19日 印刷

平成21年3月27日 発行

編集 長野市教育委員会

発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 鬼灯書籍株式会社